小学校英語 Just Now

長野県の小学校英語の状況

ー長野市，小諸市と佐久市浅科での指導を通してー

渡邉時夫　Watanabe Tokio
（清泉女学院大学）

Ⅰ　はじめに

筆者が住んでいる小諸市の英語活動の指導を引き受けてから3年になります。市内には小学校が6校あり，ALTが3名採用されています。したがって，各校とも隔週でALTとのT-Tを実施することができます。英語活動は1年生から導入されており，高学年は，3年前から年間35時間を目標としています。途中交替したALTもいますが，これまでのところALTは全員評判がよいようです。年に2回，いずれかの小学校が公開授業を行っています。英語活動の条件が整っていると言えます。

筆者の勤務先の大学がある長野市の英語活動の指導も引き受けています。長野市は，小諸市とは対照的に，英語活動の条件が未整備で，市内に小学校が55校あるにもかかわらずALTは1～2名しか配当されていません。各学級がALTと触れ合うことのできる機会は，年に1回程度です。

長野市は，今年度から新学習指導要領の「外国語活動」を前倒しで年間35時間実施しています。長野市教育委員会は，市内の小学校を7つのグループに分け，市内にある2つの大学（信州大学と清泉女学院大学）に地区を分担して指導を依頼しています。長野市の小学校は，HRTがほぼ毎時間単独で「外国語活動」を担当しています。

Ⅱ　基本的な指導方針

小諸市においても，長野市においても，「外国語活動」の担当者には，指導に際して，下記の点を理解していただいています。

(1) 小学校では，子どもたちが英語を聞いて，おおよその内容を理解できるようになることを目標とする。

(2) そのためには，英語のインプットをできるだけたくさん与えるように工夫すること。また，子どもたちには話すことを強制しない。

(3)「理解できるインプット」を与えるために，HRTとALTを対象にMERRIER Approach（メリアー・アプローチ）の考え方を紹介し，実践していただいている。
MERRIERとは，Mime, Example, Redundancy, Repetition, Interaction, Expansion, Rewardのイニシャルを取って命名したもので，子どもたちに英語で話す場合の留意点（コツ）を述べたものです。できるだけジェスチャーや表情を豊かに話す（M），抽象的すぎると思ったら，例を挙げたり，エピソードを話すなど，できるだけ具体的に話す（E），同じ内容を理解させるのに，発想を変えて話す（R），大切だと思う単語や文や内容は繰り返し話す（R），先生だけが続けて話すことを避け，子どもたちとことばを交換しながら話す（ただし，子どもたちに負担のかかるような返答を求めない）（I），子どもたちが不完全な英語で話した場合も，暖かく受け入れた上で正しく言い換えたり，付け加えたりする（E），常に励ましの言葉を忘れない（R）という考え方です。（MERRIER Approachについて詳しくは三省堂のホームページで「小学校英語活動コラム」をご覧下さい。）

(4)「考えさせる」ことを重視し，英文を機械的に復誦させたり，暗記させたりすることはできるだけ避ける。

(5) HRTは，英語のリズムを身に付け，子どもたちへの指示を英語で言えるように努める。

(6) 長野市では，できるだけ『英語ノート』に加えて他の音源を活用し，インプット不足を補う。

Ⅲ　アンケート調査とその結果

ALT がある程度配置されているか否かにより，「外国語活動」に対する先生の意識や評価が異なるだろう，ということは容易に推測できます。そこで，小諸市 3 校および佐久市浅科小学校（今年 3 月までの 2 年間のいわゆる「中核校」。ALT が豊かに配置され，筆者が指導）と長野市 3 校（筆者が指導）にお願いし，アンケート調査を行いました。小諸市・浅科小および長野市とも，高学年担当者のすべて（前者 32 名，後者 30 名）を対象とし，すべての担当者から回答を得ました。主な項目について，アンケートの結果と考察をしたいと思います。

(1) 小諸・浅科と長野が大きく違う点

(a) 英語で指示を出すこと

	小諸・浅科	長野
慣れてきたように思う	20.0%	3.2%
以前よりは抵抗がなくなった	56.7%	58.1%
大変抵抗があり，なかなか使えない	23.3%	38.7%

英語を使うことに慣れてきたと認識している先生の割合は，ALT と頻繁に接している小諸・浅科の方がはるかに大きいです。長野の先生の 1/3 以上は，英語が使えず苦労している姿が読み取れます。しかし，どちらのグループも，次第に英語を使うことに抵抗がなくなってきていることは，将来に希望が持てるように思います。

(b) 小中の連携についての評価

	小諸・浅科	長野
始まったと感じている	32.0%	11.5%
始まったとは感じていない	68.0%	88.5%

ALT の配置を重視している地域は，必然的に小中の連携にも努力している傾向があり，そのことが小学校の先生の意識に表れているように読み取れます。

(c) 研修を受けたいことは何か（複数選択可）

小諸・浅科 （ ）内の数字は人数	長野 （ ）内の数字は人数
多用なゲーム（18）	多様なゲーム（20）
英語の指示（16）	英語の指示（19）
いわゆる英語の会話力（16）	いわゆる英語の会話力（19）
ALT との T-T のあり方（14）	英語の正しいリズム（13）
ことばや文化の指導（14）	『英語ノート』以外の教材（12）
『英語ノート』以外の教材（11）	『英語ノート』の活用法（12）
『英語ノート』の活用法（10）	ALT との T-T のあり方（9）
他校の実践について（10）	ことばや文化の指導（9）
小中の連携（8）	英語の歌の指導（9）
母音や子音の正しい発音（7）	母音や子音の正しい発音（7）
英語の正しいリズム（7）	他校の優れた実践について（4）

単独で教えることの多い長野市の先生は，小諸・浅科の先生よりも「英語のリズム」に不安を持っていることが分かります。また，ALT との T-T について比較的関心が薄いようです。これは，実現性が少ないからでしょう。その分，「英語の歌の指導」に関心が向いているようです。小諸・浅科の先生方が ALT との T-T で悩んでいることも分かります。ALT との T-T について聞いたところ, 30 名中 19 名が「自分がアシスタントになっている」と回答しています。

(2) 小諸・浅科と長野の傾向が類似している点

(a) 『英語ノート』だけでは満足せず，それ以外の教材を求めている先生が少なくありません。

(b) 「外国語活動」の導入について，「英語教育の将来に効果がある」と回答した先生は，小諸・浅科で 85.0%，長野で 90.0% と，双方とも肯定的です。ただし，「改善すべき点が多い」と考えている先生が，両地域とも，50% 前後です。

Ⅳ　おわりに

ALT や英語が堪能な日本人との T-T が望ましいと思いますが, アンケート結果によると, HRT には,「ALT におまかせ」という姿勢があると認められます。小諸の ALT には,「HRT に英語を使う機会を工夫してつくるのもあなたの役割」と指導しています。この指導に忠実な ALT の勤務校の HRT は, 英語の使用に自信を増している事実も分かりました。しかし，ALT に恵まれていない先生でも，英語を使う必要性がプラスに働いて，かえって英語の使用能力が目覚ましく向上しているケースもあります。最も大切なことは，努力ということかもしれません。